

● 松浦賞について ●

村 上 一 郎
(28年理・30年修)

事務局から松浦賞について書いてほしいと依頼があった。考えてみると賞の名称となった松浦多門先生に直接講義を受けた同窓生は1970年代初頭までに化学教室を卒業または修了した方々で、還暦目前の世代より年上の人である。先生を知らない世代への紹介を兼ねて松浦賞について述べさせていただきます。

松浦先生は戦後設立の広島大学の前身となった旧制広島文理科大学の一期生で、有機化学の増本文吉教授の下でテルペン化学の研究を始められ1932年の卒業と同時に助手(現在の助教)に任官し研究室に残られた。1938年に海軍兵学校の教官に転出されて3年間勤められた後、母校の広島高等師範学校に転任され中等学校教員(旧制)の養成に尽くされた。終戦の翌年の1946年に古巣の文理科大学に戻られ、広島大学の発足に伴い新設された生物化学講座を担当され植物精油の研究と後進の育成に力を注がれた。学内では評議員や理学部長として広大な運営に尽力され、学外では日本化学会中国四国支部長や日本化学会副会長を歴任されたほか第6期日本学術会議会員に選出されるなど日本の学術進展に貢献された。また、広島化学同窓会の設立にも意を注がれ1953年春の同窓会発足とともに初代の幹事長に就任された。1970年春に広島大学を停年退官され徳島女子大学に2年ほどお勤めのあと広島の鈴峯女子短期大学に移られた。ここでは学長の重責も果たされて1986年に退職された。学長在任中の1982年に日本化学会化学教育賞を受賞されている。そして、平成元年(1989年)の晩秋に83歳で逝去された。

さて、松浦基金は松浦先生が日本化学会化学教育賞を受賞を記念して本会に贈られた寄付で1983年に設けられた。毎年、基金の規定により学会賞や協会賞等を受賞した本会会員から選ばれた2名に表彰状と記念品が贈られることになっている。この規定は松浦先生がご健在のときに作られており先生のご意思が反映していると了解している。

ただ、基金が設立されて20年以上が経過し、より良き運営のための検討も必要ではないかと思わ

れる。たとえば、学・協会の賞を受けた人を再度表彰するのはどうかとの意見がある。私は松浦賞により所属する学・協会以外の人に業績を周知することは意義があり、国際的な賞の受賞者を政府などがあらためて表彰するのと似ていると思う。しかし、本会会員が全て学術的な仕事に携わっているわけではなく、受賞対象を広げることも検討されて良いのではなかろうか。また、規定では被表彰者は2名となっているが本会会員の活躍は目覚しく受賞者数が枠を超えることがよくあり(これまでの最高は4名)検討の余地があると思う。

つぎは基金が直面している問題である。基金は松浦先生から追加の寄付もあり総額百万円の基金の運用益で必要経費を捻出してきたがバブル崩壊後の低金利で台所事情は厳しくなっている。村田弘先生(文理大昭和20年卒)のご尽力もあって、なんとか元本割れをせずにここまで来たが基金の取崩しは目前に迫っている。基金の取崩しは直接的な規定違反とは言えないとしても基金としての性格上好ましいことではない。また、受賞対象の拡大や受賞者数を増やすことも基金の目減りを促進することになり対策を検討する時期が来ていると思う。

現状を是認しこのまま基金が無くなるまで運営を続けてもかなりの期間は持ちこたえられるし、金利が上昇すれば基金の回復もありうるという考え方もあるだろう。

一方、寄付により基金の目減りを補う方法もあり、寄付の意向をお持ちの方があるとの情報も耳にしている。

また、松浦基金を従来のように別経理とせず同窓会の経理と一体化した基金とするという考えもある。これによりこれまでの基金は松浦賞のみの特定財源という性格は消えるが松浦賞の事業は同窓会の経費で運営することができる。前幹事長の谷本能文先生(広島大昭和42年卒)はこのような案をお考えと聞いている。

今後松浦基金と松浦賞をどのようにすればよいか、大先輩のご遺志を無にせず広く会員から支持される方策が求められている。会員諸氏のご意見を事務局へお寄せ頂ければ幸甚である。

(平成19年度松浦基金による被表彰者選考委員会委員長)